

成果報告書

記入日 2023年 4月 14日

フリガナ：(ヒラヤマ ソウタ) 氏名：平山 草太	渡航先国名 カメルーン共和国	留学先の所属機関：ヤウンデ第一大学 帰国後の所属機関：京都大学
研究テーマ：西アフリカ・カメルーンにおけるイスラーム教育の「近代」と「伝統」とは何か——教師・子ども間の相互行為分析から——		
研究期間：2022年 3月～2023年 3月(1年ヶ月)		
研究成果(概要) カメルーン・ヤウンデとンガウンデレのクルアーン学校において、教示場面の観察と分析をおこない、その特徴と変化の諸相を明らかにした。また、書店調査を通じてクルアーンのムスハフの流通状況を把握し、さらにクルアーンを手書きする慣習や、クルアーンの呪術的利用についてもデータを収集した。		
研究成果(詳細) 研究の背景 カメルーンを含む西アフリカ各地では、植民地化以前からイスラームが受容され、ムスリムが住む場所には常に、聖典クルアーンの読み方を教える、クルアーン学校という教育の場が存在してきた。クルアーン学校では、生徒は語義の理解を要求されることなく、書写板にクルアーンの章句を書き写し、教師の個別指導のもと、その読み方を学び覚える。その際、インクを飲用したり、教師が生徒を鞭打ったりする等、文字通りクルアーンを血肉化させる教育がおこなわれることが、伝統的クルアーン読誦教育の特徴とされる。他方、植民地化以降の近代教育の普及を受けて、クルアーン読誦教育の現場では、教室と黒板による集団指導、教科書・カリキュラム制の導入といった近代化を進める動きも見られた。 従来の研究では、こうした近代化は身体的で属人的な知の形態から抽象的で画一的な知の形態への移行をもたらすものとして理解されてきた。しかし、先行研究の多くは近代化の理念的次元に関心を集中させ、物質的・身体的次元を軽視する傾向にあった。したがって、当事者たちの区分する「伝統的」ないし「近代的」クルアーン学校において、実際のクルアーン読誦学習の場面を詳細に分析し、双方を具体的に比較した研究は未だほぼ存在していない。		
調査項目と方法 今回の留学では、上記の研究の空白を踏まえ、調査地の人々によって「伝統的」あるいは「近代的」とされる各クルアーン学校における、教示場面を観察・分析することを目指した。その狙いは、クルアーン読誦教育における「伝統」と「近代」の諸相を、実際に発せられた会話や身ぶりに即して記述し、クルアーンという「書かれたもの」に対して人々がいかなる関係を持っているのか、そしてそれがどのように変化しているのかを明らかにすることである。調査地はヤウンデとンガウンデレである。 その他、留学開始後にはじめてその重要性に気づいた調査項目がある。それは、イスラーム関連書籍		

の流通状況についての調査である。なぜこれが重要かという、クルアーンの身体への刻み込みを最重要視する知のあり方は、書籍の欠乏の歴史と関連していると考えられているからだ。クルアーンを始めとするイスラーム関連書籍群が、実際にどの程度どのような形式で流通しているのかを検討することは、したがって、本研究課題の中心をなす、クルアーン教育における知のあり方とその変遷に関係していると見込まれる。そこで、ヤウンデのイスラーム書店において在庫調査をおこない、また、クルアーンを始めとする書籍の流通経路等の諸情報について、聞き取り調査を実施した。さらに、今日ではほぼ見られなくなった手稿本の文化についてデータを収集するため、ンガウンデレ在住のクルアーン筆記者に対しクルアーン手稿本の作成を依頼した。この筆記者らの作業の観察および聞き取り調査を通じて、クルアーンの筆記や呪術的利用に関する諸情報を収集した。

研究成果

1. クルアーン読誦教育におけるアラビア文字教育の特徴とその変化の把握

「伝統的」と「近代的」とを問わず、クルアーン読誦教育の第1段階をなすのは、アラビア文字の読み方教育である。「伝統的」クルアーン学校においては、アラビア文字教育は教師によって口頭でおこなわれる。その際、ハウサ語やフルベ語といった現地語が用いられることも多い。現地語によるアラビア文字教育では、各文字の現地語名、発音を示す諸記号の現地語名を組み合わせた歌のようなものが用いられる。生徒はこの歌を習得することで、クルアーンの章句を発音する規則を身につける。また、指の動きも合わせて重要視されており、発音を示す歌を歌いつつ、それに合わせて文字や記号を指でなぞることが重要だとわかる。しかし、教師は生徒のミスをそれほど厳密に指摘しないため、生徒の発音が「間違っている」ことも多い。加えて、クルアーン読誦学習がある程度の進度に達すると、生徒が該当章句を指でたどりつつ、教師の発する音声に、いわゆるシャドーイングのようなかたちで自身の声を重ね合わせることも多く見られる。

他方で「近代的」クルアーン学校においては、アラビア文字教育のために教科書が使用されたり、生徒の学習進度が帳簿や通知表によって管理されたりしている。代表的な教科書は、『カーイダ・ヌーラーニーヤ（光輝く法）』である。『カーイダ・ヌーラーニーヤ』は昨今世界各地で普及している標準的な教科書であり、その特長とされる要素は多数あるが、なかでも重要なのは発音を示す諸記号を付したアラビア文字の読み方を学ぶための、独特の歌のようなものを収録した付属音声である。学習者はこの付属音声を模範として反復練習し、クルアーンに登場する単語や文の読み方を学ぶ。この音声は、漫然とクルアーンの音声を再現しているだけではわからない、諸記号の機能を段階的かつ効率的に理解させる。他方で、教師が生徒に付属音声の模倣を厳格に要求する結果、付属音声を再現できても実際にクルアーンを読むことはできないという生徒も散見される。さらに、通知表や帳簿上では生徒の読誦を採点したスコアが記録されるが、小数点刻みの過剰なまでに厳密な採点となっている一方、実際にそうしたスコアの厳密性が有効活用されている様子が見られない等、自己目的化と呼ばざるを得ない状況もあった。

このように見ると、「伝統」「近代」の双方とも、クルアーンの文字を分析的に扱うという点では同様である。「伝統的」学校では文字の諸要素が持つ機能についての解説がなされないまま、指と音声によって文字の読み方が「間違い」を伴いつつも反復的に体得される一方、「近代的」学校ではベストセラーの教科書を用いた、画一化・マニュアル化された方法で文字学習がおこなわれるため、文言を構成する諸要素の機能についての、段階的で抽象的な理解が要求されるようになっている。ここまでは、先行研究

の指摘通りであると言えよう。しかし、マニュアルの厳密な形式的遵守を志向するゆえに、かえってそれらの持つ機能が見失われ、結果として「近代的」とされる諸要素を身体に刻み込むことが「近代的」とされるとされる、逆説的な自己目的化がみられることがわかった。このことは、クルアーンがそもそも音声優位の啓典であるとともに、その文字との関係がきわめて複雑な規則から成り立っており、したがって近代化の理念通りの抽象化と画一化が容易でない対象であることから生じているようにも思われる。従来の研究では、近代化の理念的側面に関心が集中するあまり等閑視されてきた、このような教育改革の物質的な側面と、自己目的性に焦点を当てることができた。

2. 印刷されたクルアーン（ムスハフ）等の流通状況の把握

ヤウンデのイスラーム書店を対象に在庫リストの作成をおこなった。その結果、流通するクルアーンのうちムスハフ（製本されたもの）はある程度種類が限定されることがわかった。それぞれ、おそらくチュニジアで出版されたもの（北西アフリカに伝統的に多く見られるワルシュ流派の読誦）、ナイジェリアの手稿本のコピー版（ワルシュ流派）、中東諸国からの寄付品（大多数はハフス流派の読誦）、エジプト産の標準的なもの（ハフス流派）である。特に目立つのが、チュニジアのムスハフと中東からの寄付ムスハフである。前者はナイジェリア・カノの市場から輸入されるロングセラーだが、後者は寄付品の流れたものである。頻繁に大使館や NGO 等を経由して中東からムスハフが寄付されており、こうした寄付品が流通することで、きわめて美品のハフス流派のムスハフが相対的に安価で普及するという事態が起こっている。中東諸国からの寄付は、このような公式・非公式の各ルートによって、クルアーン学校における読誦のハフス化、つまり事実上の世界標準化の流れをもたらしている一方、チュニジア産のワルシュ流派のムスハフもしぶとく愛用され続けており、複数の読誦流派の拮抗する事態が起こっている。

3. 手書きクルアーンとクルアーンの呪術的利用についてのデータ収集

クルアーン学校の教育目標はクルアーンの暗記にある。なかでも最も高く評価されるのは、クルアーンを書く能力の獲得である。そこで、記憶をもとにクルアーンを手書きすることができる人物 G 氏に、クルアーン手稿本の作成依頼とインタビューをおこなった。その結果、クルアーンを書くにあたって必要な資質と条件、道具の種類と入手法、作業手順、等のデータを収集することができた。特に重要なのは、記憶と書記の関係である。クルアーンの章句は音と文字が独特の関係を持っており、音声を再現できるだけでは文字を書くことはできない。それにも拘わらず、G 氏の記憶はいわゆる「写真的」ではなく、紙のサイズやその時々状況に合わせて、改行箇所を適切に変えながら文字化されていた。

また、書記時に発生する廃棄ページを薬として利用するという慣習があることもわかった。剃刀等を用いた修正が不可能な場合、誤記をしたページは廃棄されることになる。これを「ピッダウ (fiddau, 不要物の意)」とハウサ語で呼ぶ。ピッダウは、病気の治療や知識の獲得など様々な目的に多大な効力を持つために貴重視される。ピッダウを使用する際には、誤記も含めて全ての記載内容を書写用の木板に書き写し、そのインクを洗い流して飲用する。このようなクルアーンの章句の飲用の慣習は、西アフリカにおいて珍しいものではないが、書き間違いがそれゆえに効力を持つということは大変興味深い。今回の留学では、このようなピッダウの利用例を筆頭に、文字を摂取するという慣習、あるいは「書かれたもの」がそれそのものとして読まれることなしに力を持つという考え方、つまりクルアーンの文言の呪術的利用についての様々なデータを収集することができた。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は、調査対象地域である首都ヤウンデのブリケテリ街区（ムスリムが多数集まって暮らす街区）に居を構え、クルアーン学校に通学したり礼拝時刻にモスクに通ったりしながら、なるべく現地のムスリムの人々と同じ習慣を身につけるように心がける生活を送った。ブリケテリ街区には、2017年以來長きにわたって懇意にしている友人 M のオフィスがある。基本的には毎日このオフィスに通っては、M と調査の打ち合わせをしたり、あるいは近隣の人々も交えて茶飲み話に興じたりし、その合間に調査をおこなうという日々であった。当初は、クルアーン学校に通年滞在することだけを考えていたが、調査を進めるうちに、「そもそもここで読まれているクルアーンはどこから来ているのか？」という問いに立ち至り、主要な入手元となる書店の調査にとりかかった。長期滞在の利点を生かし、全在庫書籍の撮影と同定、在庫リストの作成といった非常に時間のかかる調査を実施することができた。この書店調査においては、自身もクルアーン暗誦者でありかつ宗教諸学に通じつつも、同時に大学院修士課程までの高等教育の経験をもつことで、世俗的な学術研究にも理解があるという希有な存在である、友人 M の献身的な調査協力があって可能になった。記して感謝したい。



写真 1 クルアーン学校



写真 2 書店調査の様子



写真 3 クルアーンを書く様子

今後の社会貢献

本研究の対象は、クルアーンという「書かれたもの」と人間の取り持つ諸関係であったが、これは人間と「書かれたもの」との関係一般の考察へと、将来的に研究の射程を広げるための第一段階である。言うまでも無く、「書かれたもの」なしに人間の生活を思い浮かべることはできない。しかし、「書かれたもの」と人間の関係の可能なあり方に対する私たちの想像力は、書物（史）研究のような一部の試みを除けば、往々にして「読む」「語る」といった典型的行為の範疇にとどまることもあり、その重要性に比して未開拓の領域は小さくない。本研究を進める過程で、クルアーンという「書かれたもの」に対する人間の関与のあり方について、「読む」「語る」のカテゴリーに収まりきれない、豊穡な可能性が示唆されてきた。SNS の普及を始めとして、「書かれたもの」が空前の規模で人々の生活に氾濫する昨今、それらを「読み」「語る」時間が不足することは否定しがたいが、このことは「ファスト教養」や AI によるレポート執筆のような新たな現象をも生み出し、問題化されつつある。こうした状況を、「読み」「語る」ことの欠如や衰退として切り捨てるのではなく、それ自体の概念によって適切に理解し今後のありべき展開を見通すうえで、本研究を進めていくことは、広範な社会貢献の可能性を持つと考えている。